

織部焼

一埋もれた茶陶がよみがえる一

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した茶陶

消費地から織部焼がこれほど多量に出土した例は初めてである。四百年近く土に埋もれていたとは思えないほど色鮮やかで美しく、その斬新な意匠からは茶の湯の「用と美」にこたえようとした陶工達のエネルギーが感じられる。

桃山時代の茶の湯の陶器といえ
ば、美濃（岐阜県東部地域）で焼
かれた黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織
部がまず第一にあげられます。な
かでも、織部焼は近年美術誌の特
集などで様々なジャンルから評論
され、さらにその声価が高まって
いるようです。

現在一般に通用している織部焼
とは、連房式登窯（慶長年間1596
～1614年に九州唐津から美濃に導
入された）で焼かれ、形徳・文様・
色釉に技巧を凝らせたやきもの
ことをいいます。製品は茶陶だけ

に限らず、鳥や魚の形をした水滴・
硯・南蛮人を模した燗台・煙管と
いった文房具や趣向品にまで及ん
でいます。

連房式登窯は量産可能な窯で、
それまでの効率の悪い半地上式單
室の登窯で焼かれていた黄瀬戸・
瀬戸黒・志野は織部焼に没頭され
ていきます。その背景には単に生
産性の問題だけではなく、茶の湯
世界の移り変わりも大きく関わっ
ているのです。

草庵の佗茶を完成させた千利休
(1522～1591)の没後、利休七哲

（高弟の武家七人衆）の一人であっ
た古田織部（1544～1615）が天
下一の茶の湯宗匠となり、武家好
みの茶風を打ち立てたことはよく
知られています。茶の湯道具もそ
れに即したものが製作され、利休
とは対照的に派手で奇抜なものを
好んだといわれています。その好
みものが呼称のとおり織部焼とい
うわけなのですが、一般に認識さ
れている「古田織部自身がデザイ
ンして美濃の陶工に焼かせた」と
いうことについての確かな記録は
なく、織部焼という名称の由来は



窯産

“奇形”に成形する場合、指先の力が特に加わる口縁部に焼成中の亀裂が生じやすい。



脚部欠落

貼付手法の“組脚”の接着状態が悪く、焼成中にはずれてしまったものと思われる。



釉薬の“カセ”

窯内部では場所によって火の受け方(温度)が異なり、釉薬の焼け方に影響を及ぼす。

よくわかっていないようです。

しかし、新しいタイプの茶陶が製作されるには、まず茶人の好みによる要求や指導伝達という経緯があったはず。それに、茶人として最高の地位を得た吉田織部が美濃の出身であったということも考え合わせますと、陶工への関与も並々ならぬものがあつたのではないかと想像したくなります。

京都市内では、中京区三条通柳馬場の調査地(1988年立会調査)から多量の茶陶が出土し、その半数以上が織部焼で占められているという例がありました。その内容も、青織部・赤織部・鳴海織部・織部黒・黒織部・志野織部・伊賀織部・織部唐津といった織部焼の全種類が揃っています。また茶の湯用具では、茶碗・茶入・香合・水指・水次があり、懐石食器には、

窯大将

数ヶ村の窯場を取り仕切る窯主のことで、郡で流行している文化を調査・吸収するため、富裕な町衆や武家・公家などと交わり、茶道にも通じていたといわれている。

目利き

茶道具の美的価値を判別する鑑識眼のことで、茶人であるための必須条件とされていた。

器形

茶碗や鉢などで、胴部にくびれをもたせ、口縁を不規則な楕円形に成形したものを。

組脚

紐状の陶土を器の底に小さく弓なりにして貼り付けた脚。

カセ

釉薬がならんらの原因で艶をなくした状態。

向付・徳利・盃・汁次・皿・鉢など

これらの遺物内容や出土状況から、この調査地は桃山時代から江戸時代初期にかけて、主に茶陶を扱っていた商家の跡地と推定しています。

この調査で出土した織部焼の中には、窯変・釉薬のカセ・向付の脚部欠落など、焼成段階での不良品とみられるものが多く含まれており、窯場での製品検査は大ざっぱだったことがうかがえます。実質的な選別はおそらく消費地京都で行なわれていたからでしょう。

出土品のなかにはこの選別によって廃棄されたものも多く含まれているだろうと考えられます。

しかし、茶陶の選別というのは一定の美的基準によって佳い作品を見いだすことが目的ですから、当然優品として採り上げられたものもあるでしょう。ひよっとすると、図録によく出品されている〇〇と銘のついたあの名品がそうかもしれません。では誰がそのような選別に携わっていたのでしょうか。茶人か、あるいは窯大将といわれた者か。いずれにしてもそこには、目利きによる美的選別というものがあつたと思えるのです。

茶の湯という数寄風流の美を求めた厳しい審美眼によって選に洩れ、多量に廃棄された茶陶一織部。しかし、それらは美的基準というものを知ら手がかりとして、名品といわれている伝世品と同様の価値をもってよみがえつたといえるでしょう。(堀内寛昭)



黒織部茶碗

焼成が良好で釉薬もよく焼け、口径と高台の比率が2:1とバランス良く整っている。出土したなかでは完成度の高い製品である。何が原因で廃棄されたのだろうか。